
男の娘なIS操縦者

丈馱 春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の娘なIS操縦者

【Nコード】

N9193Z

【作者名】

丈駄 春

【あらすじ】

時は西暦20XX年

ISと呼ばれる女性専用のマルチフォームスーツの登場により女尊男卑が強い世の中女よりも可愛らしい男の娘、柊 八千代ちゃんは織斑君の登場によりIS適正値の検査を受けて高反応を出してしまうこうしてIS学園に強制入学させられた彼が思うことは一体何なのか？

男の娘描写が薄いかもかもしれませんとぞご許しを

またそういった描写が嫌いな方や原作キャラに思い入れが深い方は
多分嫌悪感がつよいと思うので見ないことを推奨します

第1話 『1年ぶりに再開した幼馴染が変態になっていた』

??? side

「ここがIS学園か」

僕こと柊 八千代は女性しか動かせないマルチフォームスーツ『インフィニット・ストラトス』通称『IS』の操縦者を育成するIS学園に来ていた

なぜ僕がこんな場所に居るかというところ・・・

男性でもISを動かせるという世界のパワーバランスを崩しかねないニュースをやっていた

せっかくだし、IS動かせるかもしれないと天然属性な母親に言われ、渋々IS適正値を測る政府研究機関に行って反応しなかったという結果を持って帰るつもりだったのだからあることが適正値が高く実際にISに触ると動いてしまったものだからそれはもう大変二人目のIS男性操縦者としてIS学園に強制入学することになりました

という訳だ

しかしいざIS学園に入ると視線が痛い

ISを動かせる、男性なんてそうざらにはいない

周りの人たちが興味の対象になること間違え無い

ああ・・・どうしてこうなってしまったのだろうか

とにかく・・・もう一人の男性IS操縦者であり幼馴染である織斑
一夏にはやく合流せねばならない

そうと決まれば早く一組のクラスに向かおう

s i d e o u t

一夏 s i d e

・・・これは想像以上にキツイ

何がキツイかっていうと・・・女子の視線がキツイ

上野動物園のパンダの気持ち分かる気がする

がらがら

教室の扉を開けて現れたのは、一人の男装した少女

茶味を帯びたポニーテールを揺らしながら俺の隣の席に座る

「・・・って八千代!？」

「ハロ、一夏、元気そうだなによりだ。入試でISを動かしたみた

いだね」

「なんで・・・まさかお前女だったのか！」

「んな訳ないでしょうが！！！」

八千代は顔を赤くしながら机を叩く

「いい！一夏、この際だから言っておくけど、僕は真正正銘のお・と・こ！今度女の子扱いしたら、一夏の恥ずかしいエピソードをクラスメイトに言うからね！」

つーんとした顔になると、ひそひそ話が聞こえてくる

まったく変わらないな

女扱いされるとすぐ怒るクセ

「何か失礼なこと言ったでしょ」

変に勘がいいのも相変わらずだった

side out

八千代 side

全く・・・一夏は

相変わらず僕のコトを怒らすのが上手だった

『やっぱり女だったのか』

一夏の声を思い出す

やっぱりってなんなんだよ

やっぱりって

ああもう苛々するなあ

・・・僕って女の子らしいのか

ええい！

こうなったら高校デビューしてやる！

そうと意思を硬く決めるとまた一人新たな人が入ってきた

なんか体つきは大人なのに顔だけ子供

子供が背伸びしているような人だなあ

「みなさんこんにちは、私は副担任の山田 真耶です。よろしくお
願いますね」

にこり

と山田先生は笑ってはみるものの誰一人反応してくれない
やりにくい

じつにやりにくいだろう

だれかがやらないなら僕がやるぞ

「よ、よろしくおねがいします」

「あ、いえこちらこそ」

なんで教師が生徒に頭を下げているんだよー

内心ツツコミを思っていると

山田先生は出席簿を開いて、

「そ、それじゃあ、自己紹介でもしてもらおうかな、出席番号順で」と言う

うん。定番だね

まず、名前に趣味、特技

って僕・・・趣味ないじゃん

落ち着け・・・落ち着くんのだ

とりあえずなんか読書でもするって言っとけばいいや

しばらく自己紹介を進んでいくと、一夏の番になっていた

しかし一夏は反応もせずになにかに思い悩んでいるようだ

「織斑君、織斑君！織斑 一夏君！」

山田先生の呼び出しに答えた一夏は席から立ち上がった

「は、はい！」

「あ、あの大声だしちゃってごめんなさいね。今自己紹介しているんだけど『あ』から始まって『お』なんだよね自己紹介してくれるかな？駄目かな？」

「します！しますからそんなに謝らないでください。えー織斑 一夏ですよろしくお願いします」

そのまま周囲の様子を見渡すようにチラリと見る

（何だよ、その『それだけで終わりじゃないよね』な視線はええい南無三）

すーはー

という深呼吸の後

クラスメイトの関心は一夏に集まる

「そこにいる八千代は俺の嫁だ！」

スパアン

二つの物理的な干渉の衝撃音が一夏の頭に響く

一つは黒スーツを着た

一夏のお姉さん

織斑 千冬による出席簿アタック

そしてもう一つはに束さんにもらった特製のハリセンによる僕の攻撃だ

「いゝちゝかゝ君、誰が嫁だつてゝ」

「いや・・・場を和ますためにもひつようだと思っただつて！」

「そんな場の和ませ方があるか！あつてたまるか！」

「柊落ち着け」

千冬さんに言われて頭に上っていた血が戻る

「すみません、自己紹介を邪魔しました」

「あ、そういえば織斑先生、もう会議は終えられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶、押し付けてしまつてすまなかつたな」

千冬さん教卓の前に立ち、自身の自己紹介を始める

「諸君！私が君たちの担任を勤める織斑　千冬だ君たち新人を一年で使い物にするのが私の仕事だいいか私の言うことには『はい』と返事をしろ、よくなくても返事をしろいいな？」

なんという無茶振り

これが千冬さんの教育方針なのかと驚きを隠せずにいられないと・

・

クラス中から

『キヤアアアアアアアアアアアアアアアア』

という黄色い叫び声が教室中から外へ響いた

「千冬様！本物の千冬様よ！」

「私、お姉さまのファンなんです！」

「わ、私はお姉さまに憧れてこの学園に来たのよ！北九州から」

「私、お姉さまのためなら死ねます」

いろいろツツコミ所は満足な箇所で置かれている

千冬さんを見てみるとやれやれと頭に手を置いていた

「まったく、毎年よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ・・・あれか、私のクラスにだけ置いているのか？」

彼女がため息をつくときクラスは益々ヒートアップしていた

「もつと叱って罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をしてえ」

きつと彼女たちはもう手遅れなのだろう

僕は彼女たちから目を逸らして空を見つめる

ああ、空はなんでこんなに青いんだろう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9193z/>

男の娘なIS操縦者

2011年12月28日20時52分発行